

中期ホワイトヘッドにおける感覚覚知と自然

——思考を前提としない知覚による経験論——

西 脇 祐*

要 旨

本稿は、中期ホワイトヘッド経験論の枠組みを提示することを目的とする。先行研究は、所与に注目してホワイトヘッド経験論を特徴づけている。なぜなら、先行研究は、ホワイトヘッドの経験を、受動的な感性体験として捉えているからである。しかし、ホワイトヘッドの経験は、経験主体が受動的に所与を受けとることで成り立つのではなく、経験主体と自然全体との相互関係によって形成される出来事なのである。本稿は、このような経験の構造を明らかにすることで、ホワイトヘッド経験論の枠組みを提示する。

そのためにまず、ホワイトヘッドがいかなる経験に依拠しているのかを、感覚覚知と思考との関係のもとで明らかにする（第I章）。次いで、全体部分関係を論じることで、経験主体と自然全体との相互作用によって形成される経験がもつ構造を考察する（第II章）。最後に、以上の特徴をもった経験は、いかなる態度によって、知を形成していくのか、を論じる（第III章）。このようにして、本稿は中期ホワイトヘッド経験論の枠組みを提示していく。

目 次

はじめに

- I 思考を前提としない知覚——感覚覚知という出発点
- II 実在論的性格——全体部分関係における「自然の一部」解釈
- III 直接的本能的態度——多様な関係が確立する場としての自然
おわりに

はじめに

ホワイトヘッドは多くの文献で経験論者とみなされ、彼自身も経験に依拠することが重要であると述べている。中期ホワイトヘッド経験論に関する先行研究としては、彼の経験論と伝統的なイギリス経験論における所与の比較が挙げられる。

市井は、両者を区別する根本的な特徴として、ホワイトヘッドが「直接的な経験における所与性 [中略] をもっとも具体的に把握した」¹⁾と述べている。市井はそのうえで、中期ホワイトヘッド経験論を検討した。ホワイトヘッドが所与性を具体的に把握したという研究がある一方で、彼が論じる所与は具体的な経験には見いだされないという研究もある。ラッセルは当初からホワイトヘッドの所与に対して疑問を抱いていた²⁾し、ローは、もし正統な経験論の立場なら、「ホワイトヘッドが主張する、諸関係からなるネットワークは、認識の直接的な所与ではなく、[中略] 推論の結果である」³⁾と批判点を挙げている。このように先行研究の多くは所与を軸に議論を展開するものであった。

先行研究により、所与を通したホワイトヘッド経験論の特徴が明確になった。しかし、そもそも中期ホワイトヘッドにおける経験論がどのような立場であり、いかなる経験のもとで彼が自然哲学⁴⁾

* にしわき ゆう 文学研究科哲学専攻博士課程後期課程
2022年9月22日 査読審査終了

を論じているのかを検討する研究は少ない。それに加え、中期ホワイトヘッド経験論の全体的な枠組みを提示しようとする試みは充分になされているとはいえない状況である。

本稿の目的は、中期ホワイトヘッド経験論の枠組みを、次の三つの点において提示することである。その三つの点とは、彼の経験論がいかなる経験に依拠しているのか、その経験の構造とは何か、彼の経験論はどのような態度でもって経験を一般化して知識を拡大していくのか、である。この三つの点は、(1) 思考を前提としない知覚への依拠、(2) 実在論的性格、(3) 「直接的本能的態度 (immediate instinctive attitude)」という三つの特徴をみていくことで明確になる。本稿では、これらの特徴を「感覚覚知 (sense-awareness)」と、自然という概念を中心に検討していく。

第Ⅰ章では、思考を前提としない知覚である感覚覚知について論じる。この感覚覚知に、ホワイトヘッド自然哲学は依拠することになる。これにより、思考の形式を自然に当てはめて自然を探究するという事態を、自然哲学は避けることができる。

ローは、自然が思考から独立していることから、中期ホワイトヘッドにおける実在論的性格を指摘している⁵⁾。これにより、感覚覚知の「末端 (terminus)」は自然の一部となる。第Ⅱ章では、「自然の一部」という関係がどのようなものとなるのかを、全体部分関係と重ね合わせつつ明確にしていく。これにより、全体と関わる経験がもつ構造の概略が明らかになる。

第Ⅲ章では、直接的本能的態度を論じる。ホワイトヘッドはこの用語を頻繁に用いてはいない。その用語を強調したのはステンゲルスである⁶⁾。この態度を強調することで明確になるのは、経験を通して、何が自然に属し、何が心に属するののかという分類を彼が行っているのではない、ということだ。彼は、感覚覚知のもとにあるすべてを自然内に見いだす経験論を論じているのである。このような態度でホワイトヘッドは経験を一般化し、

知識を拡大していくのである。

I 思考を前提としない知覚——感覚覚知という出発点

ステンゲルスは、ホワイトヘッド自然哲学が非常に曖昧な出発点を設定してしまったことを指摘している。その出発点とは、感覚覚知である。感覚覚知は、明確な知覚ではないが、しかし、低級な生命ももっていると類推されうような知覚である⁷⁾。雑音がするところへ、ウサギが頭を傾け、雑音の意味を探究するといいうるかもしれない。しかしこのような比喻は感覚覚知の根本的な意味を曇らせるのではないかと彼女はいう⁸⁾。本稿でも比喻を多用することなく、ホワイトヘッドが用いている言葉との関連のもとで感覚覚知を明確にしていきたい。

それでは、感覚覚知のもつ根本的な意味とは何であろうか。本稿を通して明らかになるのは、感覚覚知が自然内部における知覚であるということだ。つまり、感覚覚知とは、無尽蔵で捉え難い自然のただ中で、自然全体を感じつつも、自然内部において自己の視点を確立してゆく知覚である。第Ⅰ章では、ホワイトヘッド経験論の出発点である感覚覚知の立場を、自然と思考とのかかわりのもとで、明らかにする。

まず議論をわかりやすくするために、第Ⅰ章で扱うホワイトヘッドの用語を、形式的に定義しておきたい。ホワイトヘッドは私たちが日常的に行う、五感を通した知覚を、感覚覚知 (sense-perception) としている。感覚覚知には二段階ある。感覚覚知と思考である。感覚覚知は感覚覚知の基礎となる。つまり、思考のない感覚覚知はありうるが、感覚覚知のない感覚覚知はありえない。また、感覚覚知が思考を含まない場合は、感覚覚知は感覚覚知と同義となる。一方、感覚覚知が思考を含む場合は、感覚覚知は背景に退き、感覚覚知がもつ関係性を思考は捉えることができなくなる。第Ⅰ章では、このような感覚覚知と自然との

関わりも問題となるため、自然と上述した用語との関わりにも触れておく。彼の自然哲学において、感覚覚知に自然の要素が与えられていることは議論の前提となっている⁹⁾。感覚覚知は自然の要素を直接捉えることができる。一方、思考において、感覚覚知は背景に退いてしまうため、思考は自然の要素を直接捉えることができない¹⁰⁾。以上のような形で、感覚覚知、感覚覚知、思考、自然を、簡単にはあるが、定義することができる。

さて、自然と思考との関係をさらに詳しくみていきたい。自然と思考との関係を論じていくなかで、ホワイトヘッドは感覚覚知の立場を提示していく。

自然は、諸感覚を通じて知覚において私たちが観察する何ものである。この感覚覚知において、我々は、思考ではなく、かつ思考に対して自己完結的 (self-contained for thought) な何ものであるを覚知している (aware of something)。思考に対して自己完結的であるというこの性質が自然科学の基礎にある¹¹⁾。

まずもって指摘したいのは、自然は思考に対して自己完結的である、ということだ。つまり、自然とは、思考の手を借りることなく、思考がなす統一作用を必要とせず成立するような何かである。このような性格が、自然科学が扱う自然の基礎にある。自然科学は、思考のあり方を考慮に入れずに、自然をそれのみで扱っている。次に指摘したいのは、自然を知覚するのは思考ではない、ということだ。自然を知覚することとは、何ものかを思考することではなく、「何ものかを覚知している」ことなのである。ただし、自然は感覚覚知に対しても自己完結的ではある。感覚覚知は自然の要素を覚知するが、しかし、感覚覚知そのものが自然であるわけではないからだ¹²⁾。自然は、思考にも感覚覚知にも自己完結的である、すなわち自然は自ら必要なものはすべて兼ね備えている。

以上により、自然は思考に対して自己完結的なこと、自然を捉えるのは思考ではなく感覚覚知であることが、自然と思考との関係をみていくことで示された。

自然は感覚覚知がもつ形式で成り立っているわけではないが、しかし、感覚覚知は自然を思考ではない何ものかとして覚知している。感覚覚知の構造は第Ⅱ章において全体部分関係をみていくことでより明確になる。ここでは、思考と感覚覚知の関係——感覚覚知が思考を前提としていないこと——を明確にしたい。

次に、思考と感覚覚知の関係をみていこう。思考は、お互いに関係することのない「諸存在 (entities)」をまず自身の前に据え、それから諸関係を伴った存在を捉えるあり方をしている。存在は、「事物 (thing)」と同様の意味で用いられている¹³⁾。事物は、命題において、「これ (this)」、「それ (that)」を用いて「指示的 (demonstrative)」に表現されるものでもあり、定冠詞や不定冠詞を伴って「記述的 (descriptive)」に表現されるものでもある¹⁴⁾。一方、感覚覚知は、まずもろもろの関係項を捉え、その次によりやく明確な個別性を識別するあり方をしている¹⁵⁾。思考は個別的な諸存在から、それらの関係へと向かい、一方感覚覚知は関係を伴った関係項から個別的なことへと向かう。一見、両者は反対方向の営みにすぎないかに思える。しかし、思考が見いだす関係は、感覚覚知が見出すと同様の関係ではない。なぜなら、思考は、感覚覚知がもつ関係の網を抽象化したものだからだ。「存在とは具体からの抽象化であり、具体とは、その完全な意味において、全体性を示唆する」¹⁶⁾のである。ここでいう「具体」とは、もろもろの関係項のことである。関係項がもつ関係は、全体性を示す関係となる。

したがって、思考は、感覚覚知がもつ全体性を示す関係を捨象してしまうのである。その結果、個別的な存在から関係を導きだそうとしても、感覚覚知が示す関係をとりだすことができなくなる。

感覚覚知から思考へ移行することで、自然の内容は大きく損なわれてしまうのである。

感覚覚知によって認識に直接措定されるいかなる自然の性格も、説明することはできない。感覚覚知によって経験に入りこむ、自然の固有な本質的性格は、思考にしてみれば、むきだしの存在としてのその個性を保護する役にすぎないという意味において、自然の性格は思考にとって理解できないものである。このように、思考にとって、「赤」は単に明確な存在なのであるが、一方、覚知にとって、「赤」はその個性の有する内容をもっている。覚知の「赤」から思考の「赤」への移行は、内容の明らかな喪失をとまなう¹⁷⁾。

感覚覚知は自然を自身の形式で統一するのではないが、しかし、感覚覚知は自然の性格を見いだすことができる。この知覚領域において自然をたしかめなければならぬのである。自然を探究する際に、思考を用いてまずもって個別的な存在を想定するやり方では、感覚覚知にある自然の要素を説明することはできない。なぜなら、思考によって関係項がもつ多項関係を捨棄してしまい、その関係は背景へと退いてしまうからだ。関係が考慮されていないむきだしの個別的な事物から自然を捉える思考のあり方は、自然の内容である関係を、事物の保護役である背景にすぎないとみなすことになる。

一つの例をみてみよう。思考のもとにある、目の前にあるコップの灰色について考えてみる¹⁸⁾。普段通りコップを眺めれば、それは灰色に見える。次に赤のゴーグルをかけてみる。すると、目の前のコップは赤色になる。しばらくすると、目は赤いゴーグルに順応し、コップは灰色に見えるようになる。そこで、ゴーグルをはずすと、コップは緑色に見えることになる。それでは、個別的なあり方をした事物には、灰色が属するのか、それと

も赤か、緑か。このように存在をまずもって考えるやり方は、色ももつ内容〔関係性〕を喪失し、何が存在に属するのかという混乱を引き起こす。もし、コップに灰色が属するのなら、その他の色は錯覚とみなされるだろう。

一方、感覚覚知において形成されるのはまずもって自然の特性である。厳密な言い方ではない¹⁹⁾が、この場合であれば、照明—ゴーグル—コップ—身体的なあり方という多項関係とその質が自然の特性である。このような多項関係のただ中で質を考えることで、先ほど考えた灰色、赤、緑は、自然の一部として見いだされる。決して、いずれかの色が錯覚であるという考え方にはならない。下条は色彩感覚と意識に関する考察を経て、「色はけっして『ものに帰属される性質』といった、固定的で単純なものではなく、「むしろ照明、ものの表面の性質（およびその周辺の表面の性質）、知覚する側の視覚系の特性といった要因の相互作用から『場』が形成される、そういう複雑で変幻自在の『場』の文脈のなかで、はじめて意味をもつ、関係性の質のこと」²⁰⁾、と述べている。ホワイトヘッドの感覚覚知も、下条のいう「場」と類似したものと考えてよいだろう。ホワイトヘッドの場合、このような「関係性の質」は、色のみではなく、音や感触といった五感において見いだされるすべての質に適用される²¹⁾。

以上のように思考を前提とせず、むしろその移行によって思考が成り立つような感覚覚知にホワイトヘッドは自らを制限することになる。つまり、ホワイトヘッドは思考のあり方を自然に当てはめることなく、感覚覚知において経験していることに自身を制限し自然を探究するのである。この態度をステンゲルスは典型的な経験論者の決心であるとしている²²⁾。ホワイトヘッドは、感覚覚知において見いだされることをもとに、自然認識を拡大してゆくのである。

感覚覚知の直接的陳述として私たちに知られ

ることについて影響が及ぼされうる最大の領域の一般化に、私はもっぱらかかわっている²³⁾。

本章で述べたのは関係性のもとにある質のみである。ホワイトヘッドはそのような経験からさらに歩を進め、感覚覚知に見いだされる様々な覚知されるものを論じていく。感覚覚知から出発し、その構造から見いだせることのみで覚知されるものを論述していき、その構造から導き出される関係を拡大していくことが、中期ホワイトヘッドの経験論なのである。

II 実在論的性格——全体部分関係における「自然の一部」解釈

『自然認識の諸原理』の序文において、ホワイトヘッドは、自然概念の統一的表現のために、自然哲学の主題が何に関わるのかを明確に述べている。

しかし、本書の研究は哲学的議論のほんの側面に触れているにすぎない。私たちは、自然に、つまり、知覚認識の対象にかかわっているのであって、認識するものと認識されるものとの総合にかかわっているのではない。この区別は、自然哲学を形而上学から分け隔てるものである。したがって、自然に関するいかなる混乱も、それを認識する心が存在するという考えに頼ったところで解決することはないだろう。私たちの主題は認識されるものの整合性なのであって、私たちが繚れをほどく混乱は、認識されるものとは何であるかに関することである²⁴⁾。

ホワイトヘッドは、自然哲学と形而上学を区別し、認識するものと認識されるものとの総合を、自身の自然哲学は考察しないとしている。自然を論じる際には、認識されるものの整合性のみが関わることになる。この認識されるものとは、感覚

覚知における「何ものか」である。

しかし、「認識するもの」との総合を考慮せず、「認識されるもの」に関する理論を探究するのはどのような事態なのだろうか。本稿ではまず、ローの指摘した実在論的性格²⁵⁾を頼りに、「認識するもの」との総合を考慮しない「認識されるもの」とはどのような事態なのかを明確にする。これによってわかることは、自然が思考と関わりのない仕方ですべて実在している、とホワイトヘッドが想定していることだ。この考察をもとに、自然と感覚覚知との関わりを全体部分関係²⁶⁾の構造において明確にしていく。

1. 実在論的性格

まず、感覚覚知と自然との関係に注意を向けたい。なぜなら、感覚覚知とは、心の内部における現象ではないからだ。心の外部に自然があり、自然が心に働きかけることで、心の内部に感覚覚知が現象するという仕方ですべて実在しているのではない。したがって、感覚覚知が「なぜ」生じたのか、という語り方をすることはできない。

しかし、認識を考慮すれば、私たちは「心の内部」や「心の外部」といったあらゆる空間的隠喩を拭き去ることになる。認識は究極的である。認識に関して「なぜ」を説明することはできない。私たちは認識に関する「何」を記述しうるにすぎない。つまり、私たちは内容やその内的関係を分析しうるが、しかし、なぜ認識が存在するのかを説明することはできない²⁷⁾。

心の内部や外部という考え方をしてしまえば、心の外部の体系が、内部の体系に外的に関係するのみにになってしまう。光が目に入り、そのことで心に色が映ったとしても、或る光がなぜか心に或る色を生じさせるといった対応関係しか見いだす

ことができない。そして、光に関しては心の外部の体系で、色に関しては心の内部の体系で論じることになる。もしこのような仕方論じてしまえば、次になされるのは、認識するものと認識されるものとの総合を目指す形而上学となる。ホワイトヘッドは、光も色も自然において我々が見いだすものではないのか、と考えている。つまり、それらは総合することで一つの体系において論じられるのではなく、一つの自然のもとで見いだされるのである。したがって、「なぜ」という問いではなく、「何」という問いにおいて認識を考えなければならない。「認識が究極的である」とは、認識から因果的にそれ以前のものに遡ることができないという意味である。

それでは認識と自然がもつ、内容や内的な関係とは何であろうか。ローはホワイトヘッド自然哲学に実在論的性格があることを指摘している。感覚覚知は、外部にある自然の現れとしての現象という性格をもつのではない。感覚覚知とは、自然の一部の覚知である²⁸⁾。

ホワイトヘッド自然哲学が実在論的性格をもつ理由を、ローは二つ挙げている。その理由とは、自然は心に対して閉じていることと、自然は覚知の末端であること、である²⁹⁾。

前者の理由とは、自然とは心と思考に対して独立した何ものかである、という意味だ。自然は心と思考に関わりなく実在する。自然が思考に対して自己完結的であることは、第I章で論じた。このことは、自然が思考と心から独立した何ものかであるという実在論的前提を示唆する。自然哲学は、「自然が自然科学者に対してもつ統一」³⁰⁾を表現する。自然科学の扱う自然は明らかに思考と心のあり方を前提としていないのである。

後者の理由とは、知覚されるものは思考や心の内容ではなく、自然の内容であるということだ。感覚覚知を辿れば、心あるいは思考ではなく、自然に行き着くのである。つまり、覚知の所与は、印象や表象などではなく、自然の一部なのである。

したがって、ホワイトヘッドは認識に関して言及しているが、しかし認識の外部にある自然をどのように人間は考えるのか、という問題を解決しようとしているのではない。認識にそもそも自然の一部が与えられているからだ。その自然を心の領域におけるものと想定してしまうことで自然の二元分裂が生じてしまうのである。したがって、自然と心を総合することで自然の二元分裂を解決するのではなく、二元分裂が生じないやり方で自然の整合性を論じようとするのがホワイトヘッドの自然哲学なのである。自然を二元分裂させてしまえば、自然から分裂した心の内容に関して、その正しさを判断する基準はない³¹⁾。

しかし、もしあなたが自然を二元分裂させるなら、自然がもつ時間と空間の関係に伴った直接的現象を、個人的心理という奇妙なトリックの領域に追いやることになる。[中略]さて、このように自然を二元分裂してしまえば、あなたの心理的な経験がもつ根底的な原因だと思われることについて、好きなように言えるだろう。その言明を検証するための基準を私は知らない³²⁾。

以上の議論から、ホワイトヘッドは実在論的前提に立ち、感覚覚知の末端を自然の一部とみなしていることがわかる。とはいえ、ホワイトヘッド自然哲学はあくまで実在論的前提に立つのであって、実在論を論じることはない。なぜなら、「実在概念を最高の完全さでもって表現する」³³⁾ことは、「形而上学的科学の目的」³⁴⁾だからである。そのことは、「自然の限界を越えている」³⁵⁾。ホワイトヘッド自然哲学は、実在論的前提に立つことで、認識されるものの整合性を論じ、自然概念を表現することなのである。

2. 全体部分関係における自然の一部

前節において、感覚覚知の末端が「自然の一部」

であることをみた。ただし、「自然の一部」といっても、目の前のコップや本といった存在をそのまま所与として感覚覚知が受けとっているのではない。個体を前提するのは思考のあり方である。

本節では、「自然の一部」という表現を全体部分関係のもとで明確にしていく。知覚されるものは、心の内容ではなく、自然の内容である。自然認識には、知覚者の内部や外部という表現は適用されない。自然認識において、このような知覚者の視点は考慮されない。したがって、自然哲学は知覚者を完全に除外した認識について論じているように思われる。しかし、知覚されるものは、知覚という立脚点もないような単なる自然の要素などではない。ここでは、「自然の一部」という表現がどのような関係において成り立つのか、知覚されるものとしての「自然の一部」はいかなる知覚において自然の内容なのかを検討していく。

それでは、自然の一部とはどのような関係であり、自然認識とはどのような点で認識でありうるのだろうか。認識というからには何らかの視点を帯びていなければならない。それに加え、自然認識は自然の一部の覚知であるのだから、自然全体を完全に俯瞰する絶対者の視点における認識でもありえない。ここで重要となってくるのが、「何であるか」という問いにおける知覚者の設定である。この知覚者は自然の外部から自然を観察するようなものではないし、自然の本来的姿を直観できる鋭い感性の持ち主でもない。両者の考えは、知覚者の外部と内部との対比を前提とした「なぜ」という問いにおける知覚者を提示してしまっている。

「何であるか」という問いのもとにある知覚者は、「知覚しつつある出来事 (percipient event)」といわれる。

知覚とは、同時的自然全体という背景内部で、部分的に識別された複合体を形成するところの、諸出来事ないし、諸事件の覚知のことである。この覚知は識別された複合体内で、一

つの出来事あるいは諸出来事のグループに明確に関係づけられる。この出来事は「知覚しつつある出来事」と呼ばれる³⁶⁾。

感覚覚知は、自然という全体における部分の覚知という形で記述される。この部分という言葉は、「覚知において開示された全体的事実の部分である出来事という恣意的に制限された意味において」³⁷⁾用いられている。つまり、部分が原子のような形で独立存在したのちに、その部分を組み合わせると全体が形成されるというあり方ではない。そうではなく、部分は全体における関係において自身の意味を得るようなあり方なのである。ひとまず、「自然の一部」とはこのような意味で用いられている。そして、自然の部分を覚知する感覚覚知には、知覚しつつある出来事が関係づけられている。この知覚しつつある出来事もまた自然の一部である。

それでは、感覚覚知が「何であるか」という問いに答える際に見いだされる知覚者は、「全体的事実の部分である」というあり方で見いだされるのだろうか。しかし、知覚しつつある出来事が全体から意味を与えられるだけであれば知覚しつつある出来事の立脚点を論じたことにはならない。

自然の一部である知覚しつつある出来事の立脚点は、自然内部のものでなければならない。しかし、俯瞰的な視点で自然の一部を考えてしまえば、知覚しつつある出来事は全体外部からの視点をもってしまおうだろう。したがって、知覚しつつある出来事は全体における部分でありながら、全体の内部から全体へと投げかけるような視点をもっていなければならない。本当に自然を知覚するには、知覚は自然内部のものでなければならない³⁸⁾。

「ここに現に在る」出来事の本質的存在は、なぜ知覚が自然内部からのものであり、外的探査ではないかという理由である。この出来事が「知覚しつつある出来事」である。知覚しつつある出来事は自身と結びつけられた持続、

すなわち自身と対応する「全自然」を定義するのである³⁹⁾。

この点において、知覚しつつある出来事は、知覚という立脚点を得ている。つまり、知覚しつつある出来事は、「全体的事実の部分である」という特徴をもつのみならず、「自身と対応する『全自然』を定義する」という特徴をもつことになる。全体がなければ知覚しつつある出来事は部分としての意味を与えられないが、しかし、或る知覚しつつある出来事との繋がり——「ここに現に在る」による、或る知覚しつつある出来事に対応した持続の定義⁴⁰⁾——がなければ「全自然」もありえない。このようにして、外部から全体を見渡すのではない、自然内部における認識の視点を論じることができた。或る全自然はその成立からして、自身を定義する知覚しつつある出来事の立脚点を含みもつのである。以上のような特徴をより具体的に論じるには「ここに現に在る (here-present)」や「持続 (duration)」などを詳しく論じる必要があるが、しかしここでは扱うことができない⁴¹⁾。本節の目的は、所与である自然の一部がいかなる意味であるのか [つまり、単独で存在するのではなく、全体との関係における一部であることを論じ]、いかなる認識のもとで自然の一部が捉えられるのか [つまり、自然の内部でありつつ、全自然を定義する知覚しつつある出来事からの視点による感覚覚知を論じること]、を論じることであった。本節では、全体部分関係において、自然と感覚覚知との関係を明確にするにとどまる。

本章の結論は、次のようになる。自然認識には実在論的前提があり、この前提によって、知覚は心の内容ではなく、心と独立した自然の内容をもつことができる。しかし、実在する自然の一部を本当に知覚するには、自然内部での立脚点がなければならぬ⁴²⁾。外部からの認識では心のあり方と同じになってしまうし、その知覚が自然の部分とはいえないからである。全自然の部分であり、

かつ自然内部からの立脚点をもつ知覚しつつある出来事によって、感覚覚知は自然の内容の覚知となり、自然内部の認識であるという地位を得るのである。

Ⅲ 直接的本能的態度——多様な関係が確立する場としての自然

第Ⅱ章において、自然哲学の実在論的性格をみた。これにより、知覚されるものは、心の内容ではなく、自然の内容となる。このような前提に立つとすれば、知覚されるものを選別し、知覚されるものは、心か自然のどちらに分類されるのかという態度をすることはできない。知覚されるものすべては自然の要素になるからだ。このような態度を「直接的本能的態度 (immediate instinctive attitude)」という。第Ⅲ章では直接的本能的態度を明確にし、自然が多様な関係を確立していく場として捉えられることをみていく。このような自然と対峙するなかで、感覚覚知をもとに知識を拡大してゆくのである。

ホワイトヘッド自然哲学が知覚されるものに対して取ろうとする態度は、非常に明確である。その態度とは、知覚されるものすべてが自然においてどのように整合的に関係しあっているのかを探究する態度である。したがって、感覚覚知におけるすべてを自然という一つの体系において論じようとする理論でなければ、その理論は理論的な誤り以前に、自然哲学に反する態度を取ったことになる。ホワイトヘッドが批判するのは、自らの理論の不整合性を自然の二元分裂によって隠そうとする態度である。例えば、思考のあり方を前提した自然哲学者たちは、17世紀における光や音の伝播理論の確立によって、知覚されるものすべてを自然において見いだすことが困難となる⁴³⁾。何か色を見たとき、物体から反射されて目に伝達されたのは波動であるが、しかし私たちが見ているのは色なのである。その結果、一つの自然において知覚されるものたちが、「あたかも物質の属性であ

るかのように私たちに知覚される属性（色など）」と、「物質の属性」とに分類されることになった。しかし、「われわれはなぜ第二性質を知覚しなければならないのか。存在しないような多くのものをわれわれが知覚しなければならないことは、極めて不幸な調整としか思えない。」⁴⁴⁾とホワイトヘッドはいう。自然と心の領域を用意して、自然と関わりのない色といった性質を心に加えるといういかなる「精神付加論（the theory of psychic additions）」も自然哲学の態度に反するのである。

形而上学に頼ることは、火薬庫の中にマッチを放り込むようなものだ。それによって、舞台全てが爆破されてしまう。このことはまさに、科学哲学者が窮地に追い込まれ、不整合という有罪判決をくだされたときになすことである。彼らはすぐに心を巻き込み、事情に応じて、心の中にある存在、あるいは、心にはない存在について語ってしまう。自然哲学にとって、知覚されるあらゆるものは、自然の中に存在している。私たちは選り好みしてはならない。私たちにとって赤く燃え輝く夕焼けは、科学者が現象を説明するとき用いるであろう分子や電波と同様に自然の部分であるはずだ。いかにしてこれらさまざまな自然の要素が結合しあっているのか、を分析するのが自然哲学なのである⁴⁵⁾。

このように自然探究の過程で見いだされていくことすべてを自然に帰する態度をホワイトヘッドは直接的本能的態度といている。あるものを心に、あるものを自然に帰することで感覚覚知に属するものをそぎ落とし、整った理論を作ることを、自然哲学は目的としていないのである。

このことを要求する際に、理論の影響のもとで破棄されるにすぎない知覚認識へ向かう直接的本能的態度を採用していると、私は自分

自身のことを理解している。初見に観察される以上のものを正当な注意によって自然において見出しようと、私たちは本能的に進んで信じようとするのである。しかし、私たちはより少ない内容を信じようとはしないだろう。科学に関する哲学に私たちが求めることは、知覚的に認識されるものたちの整合性に関する説明である⁴⁶⁾。

例えば、少年が野原を散歩しているときに、赤い花をみつけたとしよう。彼はそれをしばらく眺め、香りをたしかめ、花に手で触れてみる。それを摘み取ろうと茎に触れると、手に棘が刺さり痛みを感じる。ホワイトヘッドはそのような二次性質に分類されてしまう事柄も、自然に属すると主張している。では、その後少年が、その花〔野ばら〕が原子によって構成されていると知ったとしよう。そうしたら、彼は色や香りなどは自然に属することがなく、自然に属するのは原子のみであると考えるのだろうか。「私たちはより少ない内容を信じようとはしない」、とホワイトヘッドは主張している。つまり、色も香りも、原子も、自然において見いだされるのであり、「科学に関する哲学に私たちが求めることは、知覚的に認識されるものたちの整合性に関する説明」であるとホワイトヘッドは考えているのである。このような態度をホワイトヘッドは直接的本能的態度としている⁴⁷⁾。

このように自然哲学が行うことは、何が自然に属し、何が心に属するのかを分類し、自然から様々なものを追放することではない。自然哲学とは、覚知におけるすべてのものを、自然のもとで、整合的に論じることなのである。したがって、自然とはたくさんの関係が確立してゆく場であると考えられることができる⁴⁸⁾。思考が把握するような整理された関係を示すのが自然ではなく、様々な関係が確立していく場、無尽蔵の複雑性をもつのが自然なのである。

この一連の講義で私が主張してきた自然観は単純なものではないと、認めよう。自然は複雑な体系として現れ、その要因はほんやりとしか識別されない。しかし、私は尋ねたいのであるが、このことがまさに真理なのではないか。生じるすべてのものが定式化されうる究極的諸概念をついに発見したと、どの時代でも自負しているが、そのことに伴う自信に満ちた請け負いを私たちは疑うべきではないか。科学の目的は、複雑な事実の最も単純な説明を探し求めることである。事実が単純であると考える誤りに私たちが陥りがちなのは、単純化が探究の目的だからである。すべての自然哲学者にとって人生の指針となるモットーは、単純化を追求しそれを疑え、となる⁴⁹⁾。

直接的本能的態度において、自然は曖昧で複雑な関係を提示することになる。ある理論によって整った形で論じられるのが自然という概念なのではなく、感覚覚知をもとに探究することで様々な関係が確立していく場が自然という概念となるからだ。体系は整合的に理解されなければならないが、しかし、体系が適用される自然は新たな関係が確立していく場として捉えられている。このようにして、直接的本能的態度は、自然において様々な関係を確立していく態度であり、開かれた体系を提示していく態度なのである。

おわりに

本稿では、中期ホワイトヘッド経験論の枠組みを提示する試みをした。まず、彼の経験論が思考を前提としない知覚に依拠していることをみた。その知覚とは、感覚覚知であった。次に彼の実在論的性格を確認し、感覚覚知の構造を考察した。感覚覚知の末端は自然の一部となり、感覚覚知は全自然と知覚しつつある出来事との関わりから見いだされるのであった。最後に直接的本能的態度を論じた。この態度は、感覚覚知において見いだ

されることすべてを自然に帰することで知識を拡大していく態度であった。このとき自然は、関係が確立してゆく場となる。

こうした本稿の試みは、所与を中心にしたホワイトヘッド経験論解釈が見過ごしてきた面を浮き彫りにするものであった。ホワイトヘッドの経験論は、全自然との関わりにおいて形成されていく視点を考慮しなければ十分に理解されえない。所与という観点からホワイトヘッドを捉えることは、経験論を固定的な視点で考察することに繋がるだろう。本稿では、中期ホワイトヘッド経験論の全体的な枠組みを提示することで、彼の経験論の独自性をより明確にできたのではないだろうか。

今後の課題としては、中期ホワイトヘッドの対象論を経験論の文脈で論じることがある。推移する自然のただなかにあっても、私たちは「同一性 (sameness)」あるいは「永遠性 (permanence)」を「再認する (recognition)」。このような同一性をホワイトヘッドは「対象 (object)」と呼び、対象に関して多くの紙幅を割いている。また、直接的本能的態度において示した自然における多様な関係の確立を、より具体的に説明するには、対象論に関する考察が必要になってくる。中期ホワイトヘッド経験論の枠組みをより広く検討するために、今後の課題として、経験論の文脈における対象を論じていきたい。

注

- 1) 市井 (1980)、52頁。
- 2) cf. Russell (1926), pp. 119-121.
- 3) Lowe (1962/2019), p. 205.
- 4) ホワイトヘッド自然哲学の目的は、自然科学の基礎づけにあり、この基礎づけは「究極的所与 (ultimate data)」を見いだすことによって成り立つ [cf. Whitehead (1925/2017), p. vii]。究極的所与とは、自然科学が扱うすべての概念 [特に、時間と空間] がそこから派生するような所与である。したがって、彼の自然哲学とは、知覚において究極的所与がいかに存在しうるのかを探究すること、その究極

的の与件から自然科学がもつ諸概念を導出すること、という二つの段階をもつことになる。後者について本稿では触れていない。前者に注目すれば、ホワイトヘッドは、多くの人が同意するような明確な所与から議論を始めたのではなく、自然科学の諸概念が根ざす知覚における所与とは何かをまず探究したといえるだろう。したがって、彼の探究を通して、究極的所与が何であるのか、を理解できるのであり、経験に明確に与えられている所与は何であるのかを彼が議論しているのではない。

- 5) cf. Lowe (1962/2019), pp. 208-10.
- 6) cf. Stengers (2011), p. 36.
- 7) cf. Whitehead (1920/2016), p. 14.
- 8) cf. Stengers (2011), pp. 31-2.
- 9) このことは『自然認識の諸原理』において明確に述べられている [cf. Whitehead (1925/2017), pp. 8-14.]。ホワイトヘッドは、ヒュームを懐疑論者とみなし、批判している。つまり、個々の知覚が普遍的自然に関係することのできない形でヒュームが経験を考察してしまっている、とホワイトヘッドは批判している。ヒュームが因果性を否定したために、知覚者が科学を論じても、それは知覚内部での独白にすぎず、自然についてなにも言及することができなくなったと、ホワイトヘッドは解釈している。このようなヒューム像に対して、ホワイトヘッドは、知覚と自然との関係を論じようと試みている。彼は、知覚と自然との関係が経験にとって本質的なものである、と想定して経験を論じた。このような想定はカントと同様であると彼は考える。しかし、ホワイトヘッドはカントのやり方とは大きく異なる。カントは、思考の主観的条件がいかにして客観的妥当性をもつようになるのか、と問い [cf. Kant (1781/1787/1998), p. 169]、悟性のカテゴリーの客観的妥当性は、カテゴリーによってのみ経験が可能であることに基づくとした [cf. Kant (1781/1787/1998), p. 171]。それに対して、ホワイトヘッドは、全体的自然の一部が知覚に与えられており、それによってのみ知覚が成り立つと想定した。そして、その自然の一部をもとに、全体的自然の関係を論じることができると考えたのである。そのような関係を、彼は全体と部分の関係として、その関係がいかなるものであるのかを検討した。このような形で、ホワイトヘッドは自然の一部が所与として与えられていることを議論の前提としているのである。
- 10) ホワイトヘッドは『自然という概念』において、思考がなぜ自然の内実をつかみ損ねるのかという理由を述べていない。しかし、注9)で示した『自然認識の諸原理』におけるヒュームの懐疑論 [ホワイトヘッドはヒュームを懐疑論者と解釈している] への批判と重ね合わせるのなら、思考のあり方がより明確になるだろう。ホワイトヘッドは、自然と関係をもつことができなくなる主観のあり方を、思考として括り、それに対して自然と関係をもつ知覚を感覚覚知と想定したのである。そして、そのような感覚覚知がいかなるものかを自然哲学において探究したと考えることができる。しかし、このことは臆測にすぎず、本稿で明確な論拠を提示して論じることができない。
- 11) Whitehead (1920/2016), p. 3.
- 12) cf. Whitehead (1920/2016), p. 4.
- 13) cf. Whitehead (1920/2016), p. 5.
- 14) cf. Whitehead (1920/2016), p. 11.
- 15) cf. Whitehead (1920/2016), pp. 12-3.
- 16) Whitehead (1922/2017), p. 17.
- 17) Whitehead (1920/2016), p. 13.
- 18) 「それは灰色である」という命題に関する説明の方が正確であるが、しかし説明の便宜上コップの灰色についてみていく。
- 19) 感覚覚知における関係は全体性を示すような関係である。
- 20) 下条 (1999)、32頁。
- 21) このような認知を「形容態による認知 (cognisance by adjective)」とホワイトヘッドはいう。とはいえ、知覚は形容態による認知のみならず、「関係性による認知 (cognisance by relatedness)」という二つの要素を合わせたものである。詳しくは、西脇 (2019)、83-7 頁を参照のこと。
- 22) cf. Stengers (2011), p. 32.
- 23) Whitehead (1920/2016), p. 5.
- 24) Whitehead (1925/2017), p. vii.
- 25) cf. Lowe (1962/2019), pp. 208-10.
- 26) 「越えて推移する (passing over)」の文脈においても全体部分関係は論じられる。Whitehead (1920/2016), p. 58 参照のこと。ここでは知覚論の文脈における全体部分関係のみ議論している。
- 27) Whitehead (1920/2016), p. 32.
- 28) cf. Lowe (1962/2019), pp. 208-11.
- 29) cf. Lowe (1962/2019), p. 210.

- 30) Lowe (1962/2019), p. 212.
 31) cf. Lowe (1962/2019), p. 210.
 32) Whitehead (1961), p. 156.
 33) Whitehead (1920/2016), p. 32.
 34) Whitehead (1920/2016), p. 32.
 35) Whitehead (1920/2016), p. 32.
 36) Whitehead (1925/2017), p. 68.
 37) Whitehead (1920/2016), p. 15.
 38) cf. Ford (1984), p. 30.
 39) Whitehead (1925/2017), p. 70.
 40) 或る知覚しつつある出来事に対応する持続のことを、ホワイトヘッドは「同時的自然全体 (a simultaneous whole of nature)」とも表現している。
 41) 詳しくは、西脇 (2019)、75-82頁を参照のこと。
 42) cf. Ford (1984), p. 30.
 43) cf. Whitehead (1920/2016), pp. 26-7.
 44) Whitehead (1920/2016), p. 27.
 45) Whitehead (1920/2016), p. 29.
 46) Whitehead (1920/2016), p. 29.
 47) このように、ホワイトヘッド自然哲学は、デカルトの心身二元論のもとで詳細に論じられたような近代的物質観を基礎におくものではない。したがって、彼は、デカルト等によって形成された16、17世紀における物理学の考え方を、自然哲学の根本的な思想として認めていない。ただし、彼は、物理学における様々な概念を感覚覚知から導出しようと試みているため、近代的物質観からなる諸概念を排除しようとしているのではない。あくまで、近代的物質観に基礎をおくことをホワイトヘッドは批判している。
 しかし、現在の物理学は、ホワイトヘッド自然哲学から全く影響をうけずに、デカルト等によって形成された世界観に沿って発展することができている。したがって、ステンゲルスが述べているように、ホワイトヘッドの予測、つまり、当時の物理学は行き詰まっており、新たな視点を導入しなければ発展しえない、という予測は外れたと考えてよいだろう [cf. Stengers (2011), pp. 11-2]。
 これに対し、ホワイトヘッドを擁護するとすれば、たしかに彼の自然哲学の観点がなくても様々な科学は発展できており、彼の予測は外れたといわざるをえないが、しかしそれらの発展は付加的なかたちであって、統一的な形ではない、ということができる。近代科学の理論的対象は、物質にはじまり、エネルギー、情報といった形で付加的に豊かになっている。

しかし、科学は、それらが統一的な形でこの世界においていかに関わっているのかを提示するものではない。村上が指摘するように、科学の発展過程は、一つであった観察される世界から、情報、次にエネルギーがそぎ落とされたあと、物質という鋭利な概念が誕生し、その後、探究が進む過程でエネルギー、次に情報がこの世界に加えられたものとして考えることもできる [村上 (1986)、8-10頁参照]。したがって、もともと一つの世界において情報、エネルギー、物質は存在していたにもかかわらず、現在の科学においては、それらは一つの視点で論じられることがなくなっているのである。もしそうであるのなら、改めてそれらの統一的な関りを論じる必要があるだろう [この結論は村上の結論とは異なる]。ホワイトヘッドの経験は、科学が付加的に見出したそれら抽象概念を、統一的な視点から論述するものであると捉えることができ、私たちの世界に対する現実的な感覚に沿った考えの提示であると考えられることもできるだろう。

- 48) Stengers (2011), p. 36.
 49) Whitehead (1920/2016), p. 163.

参考文献

- 【欧文文献】
 Ford, L. S. (1984) *The Emergence of Whitehead's Metaphysics: 1925-1929*, NY: SUNY Press.
 Kant, I. (1781/1787/1998) *Kritik der reinen Vernunft*, Hamburg: Felix Meiner Verlag.
 Lowe, V. (1962/2019) *Understanding Whitehead*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
 Russell, B. (1926) *Our Knowledge of the External World: As a Field for Scientific Method in Philosophy*, rev.ed., London: George Allen & Unwin LTD.
 Stenger, I. (2011) *Thinking with Whitehead: A Free and Wild Creation of Concepts*, Trans. by M. Chase, Cambridge, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press.
 Whitehead, A. N. (1920/2016) *The Concept of Nature*, London: Forgotten Books.
 ——— (1922/2017) *The Principle of Relativity*, London: Forgotten Books.
 ——— (1925/2017) *An Enquiry Concerning the Principles of Natural Knowledge*, rev.ed. Eastford: Martino Fine Books.

——(1961) *The Interpretation of Science, Selected Essays*, ed. by A.H. Johnson, Indianapolis and New York: Bobbs – Merrill.

【和文文献】

市井三郎 (1980) 『ホワイトヘッドの哲学』 第三文明社
レグルス文庫。

下条信輔 (1999) 『〈意識〉とは何だろう』 講談社現代新

書。

西脇祐 (2019) 「意味づけ論と関係性による認知について」『プロセス思想』第19号、日本ホワイトヘッド・プロセス学会、74-90頁。

村上陽一郎 (1986) 「物質・生命・人間」『新・岩波講座
哲学 6』 岩波書店、1-28頁。

